

## 旧西本組本社ビル

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-11-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西本, 真一, 西本, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/309">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/309</a>

# 旧西本組本社ビル

The Former Head Office Building of Nishimoto-gumi

西本真一\*  
Shinichi Nishimoto

西本直子\*  
Naoko Nishimoto

## 要旨

旧西本組本社ビル（登録有形文化財）は和歌山で慶応年間より続く土木建設会社の本社ビルとして昭和2（1927）年に築造された。設計は岩井信一（いわいのぶかず）で、西本組の社長を務めた西本健次郎の親戚の子供である。岩井が早稲田大学建築学科に在学中、健次郎が援助を続けた経緯があり、岩井のRC造による卒業設計計画をそのまま本社ビルとして採用した。当時、鉄筋コンクリート造は日本でまだ少なかったはずであり、建築アカデミズムを通じて鉄筋コンクリート造の先端技術の習得の意図もあったと思われる。本稿ではルネサンス様式をまとったこの建物を取り上げ、計画方法に関して考察を進める。

## 1、前言

西本組は和歌山において慶応年間より続く土木建設会社であった<sup>1</sup>。この本社ビルとして昭和2（1927）年に建造されたのが「旧西本組本社ビル」として残る鉄筋コンクリート造の建物であり、後に登録有形文化財として指定された。設計は岩井信一（いわいのぶかず）<sup>2</sup>で、西本組の社長を務めた初代の西本健次郎の親戚に当たる<sup>3</sup>。岩井は早稲田大学理工学部建築学科に進学し

1 西本組に関しては三井建設株式会社史編纂室「三井建設社史」三井建設株式会社（平成5〔1993〕年）、pp.1-66を参照。

2 早苗会「早稲田建築学報」第1号（大正11〔1922〕年）、早稲田大学理工学部建築学科早苗会、巻頭写真には岩井信一の写真が掲載されている。早苗会「早苗会誌」第6号（大正8〔1919〕年度）、同8号（大正10〔1921〕年）にも岩井の住所が記されている。早稲田大学高等研究所の小岩正樹氏の御教示に感謝申し上げる。

3 西本健次郎については山崎霞舟「和歌山縣人材録 前編」和歌山日日新聞社印刷部（大正9〔1920〕年）、pp.223-224を参照。西本組の社章は後に漫画家となる小野佐世男によってデザインされたものである。小野佐世男の父である小野鉄吉は、西本組東京事務所の所長を務めた。小野佐世男展実行委員会・川崎市岡本太郎美術館「小野佐世男：モガ・オン・パレード」川崎市岡本太郎美術館（平成24〔2012〕年）、p.21。

\*環境学部非常勤講師

たが、健次郎は岩井の在学中、援助をおこなった経緯があり、岩井のRC造による卒業設計計画がそのまま本社ビルとして採用されたと伝えられている。しかし建造当初の設計図面類は一切残されていない。鉄筋コンクリート造は日本でまだ少なかったはずであり、また建築アカデミズムを通じて鉄筋コンクリート造の先端技術を習得する意図もそこにはあったと思われる。

建設指揮を執った西本健次郎は、鉄道工事に参入することで事業を大きく展開させた人間である。明治の近代化に伴い、土木工事の労働力を提供統括する、いわゆる人入れ家業から西本組を会社組織に変えて土木建築施工会社とし、本社ビルの建設を進めたのである。大正12(1923)年の関東大震災の直後であり、鉄筋コンクリート造を採用した意図は容易に想像される。1927年はオーギュスト・ペレガル・ランシー教会を完工(1923年)してから4年後に当たり、同潤会青山アパートメントハウスが竣工した年でもあった。

この建物は建設会社の本社ビルとして代々の西本家により運営され、1990年代までは事務所として使われ続けていたが、当主引退の後に三井建設へ委ねられ、建物を処分する話が進んだ。しかし当主・瑛一郎がこれを1999年12月20日に買い取り、現在に至っている。登録有形文化財に申請し、2000年に認定されたが、不動産の仕組みの中で築60年を超える建物の評価基準が確立しておらず、また当時古い鉄筋コンクリート造建造物の再利用や修復事例が少なかったこともあり、解決すべき問題は少なくなかった。2000年～2003年頃までは地元の設計者や大学の有志に試験的な賃貸を願い、またさまざまな協力を得た。2003年以降は東京の日辰画廊・小泉絢子氏はじめ現代美術展企画者や諸作家の協力のもとに西本家が主体となる企画をおこなうなど、建物を広く公開する試みがなされた。2005年以降はテナントビルとして用いられている。

本建築の外観は、腰壁を粗い石で仕上げる方法(ルスティカ仕上)やペディメント(破風)を持つ入口部のイオニア式オーダーによって強く特徴づけられ、これは一見してルネサンス様式を思わせる。内部に入ればまた、ほぼ1:√2の単純な比例を繰り返す空間構成に同様式の影響が強く感じられる。1868年の文明開化以降、国策として外国人建築家を招聘し、西洋建築様式を学ぶことで建築の近代化がめざされた。本建築は岩井の受けた当時の大学における建築教育を如実に今日まで伝えていると考えられる。

本稿では旧西本組ビルにおいてうかがわれる設計計画方法を概括する。

## 2、建物概要

名称 : 旧西本組本社ビル (www.nishimoto-jp.com/index.htm)

所在 : 和歌山県和歌山市小野町3-43

構造形式 : 鉄筋コンクリート造3階建

建築年代 : 昭和2(1927)年

保護区分 : なし

現在用途 : 事務所及び展示空間

設計者 : 岩井信一(いわいのぶかず)

施工 : 旧西本組

主な外装 : 花崗岩張・タイル張・花崗岩張キャノピー・吹付タイル・木製サッシ・透明アクリル

主な内装：ペンキ仕上・PVCシート張・一部天井スタッコ調仕上

建築面積：83.62㎡

床面積：227.19㎡。（1階）81.75㎡；（2階）72.72㎡；（3階）72.72㎡；（PH）7.53㎡

屋階パラペット天端高さ：約14.2m

指定：登録有形文化財（2000年、第30-0042号）

掲載文献：

日本建築学会編「新版日本近代建築総覧」技報堂出版（昭和58〔1983〕年）、p.341。

三井建設(株)社史編纂室「三井建設社史」三井建設株式会社（平成5〔1993〕年）、p.23。

河崎昌之「旧西本組本社ビルの保存と活用」、和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要第21号（平成13〔2001〕年）、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、pp.1-9。

中西重裕「わかやまワクワク探検隊」わかやま新報社（平成12〔2002〕年）、pp.26-27。

西本直子「半世紀前のビルをアートスペースに」、住む。第2号、泰文館（平成15〔2003〕年）、p.172。

執筆者不詳「西本ビル再生プロジェクト：ドミニック・エザール展」新建築第78巻第10号（平成15〔2003〕年10月）、新建築社、p.53。

浜田拓志「『登録有形文化財・西本ビルの保存とアートによる活用』とその後」和歌山県立近代美術館ニュース第40号（平成16〔2004〕年3月）、和歌山県立近代美術館、p.6。

遠藤弥子（写真：安齋重男）「アートで近代建築は救えますか？」カーサ・ブルータス第48号（平成16〔2004〕年3月）、マガジンハウス、p.161。

日本建築士会連合会「和歌山エキスカッション：和歌山建物コース」建築士第53巻第621号（平成16〔2004〕年6月）、p.21。

田中禎彦（写真：小野吉彦）「身近な歴史の再発見：登録文化財の建物から、第71回 旧西本組本社ビル」住宅建築第356号（平成16〔2004〕年11月）、建築思潮研究所、pp.138-139。

本多友常・平田隆行・鳴海祥博・中西重裕「建築風土記11：まちづくりの核となる建築保存を市民の手で」建築ジャーナル第1093号（平成17〔2005〕年11月）、企業組合建築ジャーナル、pp.50-53（特にp.53）。

文化庁文化財部編「総覧登録有形文化財建造物5000」海路書院（平成15〔2005〕年）、pp.119；270。

執筆者不詳「昭和初期の建設事務所が和食器専門店として再生」コロンプス第415号（平成18〔2006〕年5月）、東方通信社、p.51。

和歌山県教育委員会編「和歌山県の近代化遺産：和歌山県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書」和歌山県教育委員会（平成19〔2007〕年）、口絵、pp.204-205；246。

小金沢智『妻木良三展「ZONE」一繋がり合う空間と作品』ギャラリー第319号（平成23〔2011〕年11月）、ギャラリーステーション、pp.106-107。

小野佐世男展実行委員会・川崎市岡本太郎美術館「小野佐世男：モガ・オン・パレード」川崎市岡本太郎美術館（平成24〔2012〕年）、pp.12、21。

松尾寛「建物語・人物語：①旧西本組本社ビル『場が放つ独特な存在感』」ニュース和歌山（平成25〔2013〕年1月9日）。

### 外壁 (図1～8)

北側前面道路に面して幅約11.2m、奥行き約7.6m、高さ約14.2mの容積を持つ。北側正面中央に破風のあるエントランスポーチがあり、階段で約96cm上がって両開き扉のある1階のエントランスホールに入る。腰壁は花崗岩であるが、ポーチに備えられたイオニア式オーダーの柱脚上までが割肌仕上で、破風上までは叩き仕上である。割肌仕上はルネサンス様式の特徴的なルスティカ風の石積みを模しており、石の接触面は角を出して正確に整えられている。その上に巡らした約60cm跳ね出す鉄筋コンクリート製の軒下のコーニス部分まではタイル張となっている。軒の下面には垂木を模した凹凸が造形され、擬石洗い出し仕上である<sup>4</sup>。窓廻り、及びパラペット立ち上がりは擬石モルタル洗い出し仕上であった。

建造当時は道路を隔てて東側にあった木造本宅と2階の廊下で結ばれていたという(後述)。1945(昭和20)年7月6日の和歌山大空襲で周辺の木造部分は消失し、ビルだけが残された。東面と南面(図4～6)に一部外装が塗装となっている部分はその折、火事によって被災した部分と思われる。正面に向かって右側は車庫として作られた部分で、擬石洗い出し仕上の壁面に破れ目地を切った壁に車の出入りのための間口約2.65mの開口が設けられている。壁面に鉄製のヒンジが残っている他、開口部の下のコンクリート床部分には落とし棒を受ける穴と思われるものが残っており、元は車庫用の大扉があったと思われる。大きな開口とビル本体の間の小壁には勝手口らしき木製扉が残されている。車庫と敷地西側隣地を隔てる塀に一部煉瓦をイギリス積みした壁面が見られる。これは健次郎が英国で学んだレンガ積み工法の試行の跡と言われる。空襲のため多くが焼け、施工記録などほとんど残されていない<sup>5</sup>が、近年、京都の疎水工事の煉瓦造の礎石や、鳥羽の煉瓦造小学校建築の図面資料などから西本組の社名が見つかっている。

### 窓

縦長形状で木製サッシにペイント仕上である。上げ下げ窓の上に嵌殺しの構成で、基本的に1階から3階まで垂直に位置をあわせてほぼ同幅で設け、左右対称に配置されている。この窓配置は、柱以外の壁面も上下に応力を伝えやすくすることができるため、全体の構造上、有利に働いていると考えられる<sup>6</sup>。1階北正面は中央のエントランスポーチを挟んで幅1.12mの窓を左右対称に設けている(図1)。細かくは各階の窓の大きさに抑揚があり、立面構成の比例へのこだわりが看取される。

### 内部

柱間は各間が正背面側が3.2m、4.5m、3.2m、側面側が正面から3.2m、4.5mであった。

内部は1階から3階まで、各階とも約7.5m四方の大きい部屋、約3.2m四方の小部屋、3.2m×4.5mの階段ホールの3つの空間からなる同じ構成となっている。ただし、1階は間口4.5m、奥

4 屋上は2010年にコンクリート改質工事を試みたところ、コンクリートスラブ上にアスファルト防水層があったため、クラック補修をおこなってメンブレン防水を施した。ペントハウスは防水モルタルだけで維持されていた。

5 鉄道工事内容などは機密保持のため、もともと記録に残しにくい工事が多かった。土蔵に残っていた主だったものも終戦直後に没収されている。

6 1946年の昭和南海地震においても特に被害は見られなかった。



図 1：旧西本組本社ビル北側正面



図 2：西北から見た旧西本組本社ビル



図 3：北東から見た旧西本組本社ビル



図 4：旧西本組本社ビル東面





図5：南東から見た旧西本組本社ビル



図6：旧西本組本社ビル南面



図7：南西から見た旧西本組本社ビル



図8：旧西本組本社ビル西面

行き2.3mのエントランスホールが7.5m四方<sup>7</sup>の部屋の北西角に割り込んで設けられ、残るL型の空間を、7.5mの幅いっぱいの執務空間と、エントランスホール東側に面する受付として使っていた。3.2m四方の小部屋は、エントランスホールと背面の階段ホールとも直接ドアで通じて、接客室に使われた。2階は大きい部屋を社長と側近の執務室とし、かつて隣接した住居部と直接廊下で繋がっていたと伝えられる。現在、東面で1～2階の窓が3階よりもひとつ少ないのは、中央部にあった住居に繋がる廊下の開口部分を後年に塞いだためと思われる。3階最上階の大きな部屋は1～2階と比べて特に開放的に造られている。他の階では7.5mの部屋の中に一本柱が立っているのであるが、最上階では支える荷重が少ないため、柱をなくすことが可能であった点が多い。また3階では天井を張らずにコンクリート構造体を露出しており、他の階では天井仕上から3mほどの天井高さであるところを、天井高さ約4mとされている。仕切りを設けない状態では南・東・北の3面の窓から自然光を取り入れることができるため、採光・通風ともに良好な部屋となっている。3階の大きな部屋は社員の娯楽場とされ、ビリヤード台が置かれていたとも伝えられている。

### 3、設計計画の分析（図9～10）

幾何学的方法に基づく分析には危うさが伴う<sup>8</sup>が、ここでは19世紀の分析方法を色濃く残す建築教育を受けた人間の卒業設計、そしてこれに基づいて実現された建物を対象としているところに特徴を有する。図9では北側の立面を取り上げたが、軒の出を含んだ建物の最大幅と、地盤高さの水平線から軒の下端までの高さなどが等しいのはおそらく偶然ではない。軒を除いた建物の幅と、割肌仕上を施した基壇部から軒の下端までも等しいと思われ、建物の外形に関してはこうして正方形を描くことができる。また建物の幅の1/2が、地上から立ち上がる石積みを模した1階部分の高さにきわめて近い。

玄関のペディメントの幅は、建物の幅を三等分して求められたと推定された。玄関の両開き扉の幅を2倍するならば、両開きの開口部の上にあるトランサム窓も含めた開口部の全高と合致する。

台座の上に載せられたイオニア式の柱についても、ウィトルウィウス<sup>9</sup>やセルリオ<sup>10</sup>の書に基づいて分析を試みており、実測値と現在までの分析の結果を図10に掲げる。台座がないものとして、台座の下端から上に伸びるイオニア様式の柱が、ある程度のオーダーの比例を順守しつつ計画され、その後に台座が描き足された印象を受ける。イオニア柱の芯々柱間を2倍するならば、入口階段の最上段の高さからペディメントの頂点までの高さと同じとなるように思われる。

7 実測調査は何回かなされたが、その結果にはいくらかのずれが見られる。壁厚の問題、寸寸との関係、比例などの問題を加味し、改めて整理をおこないたい。

8 古代ローマ時代の建物に幾何学的方法を盛んにおこなった19世紀の美術史的な流れについては、Mark Wilson Jones, *Principles of Roman Architecture* (Yale University Press: New Haven and London, 2000), pp.1-6を参照。

9 Vitruvius, *On Architecture* I. Loeb Classical Library 251 (Harvard University Press: Cambridge, 1931-1934), pp.151-197.

10 Vaughan Hart and Peter Hicks, *Sebastiano Serlio: On Architecture* I (Yale University Press: New Haven and London, 1996-2001), pp.249-392.



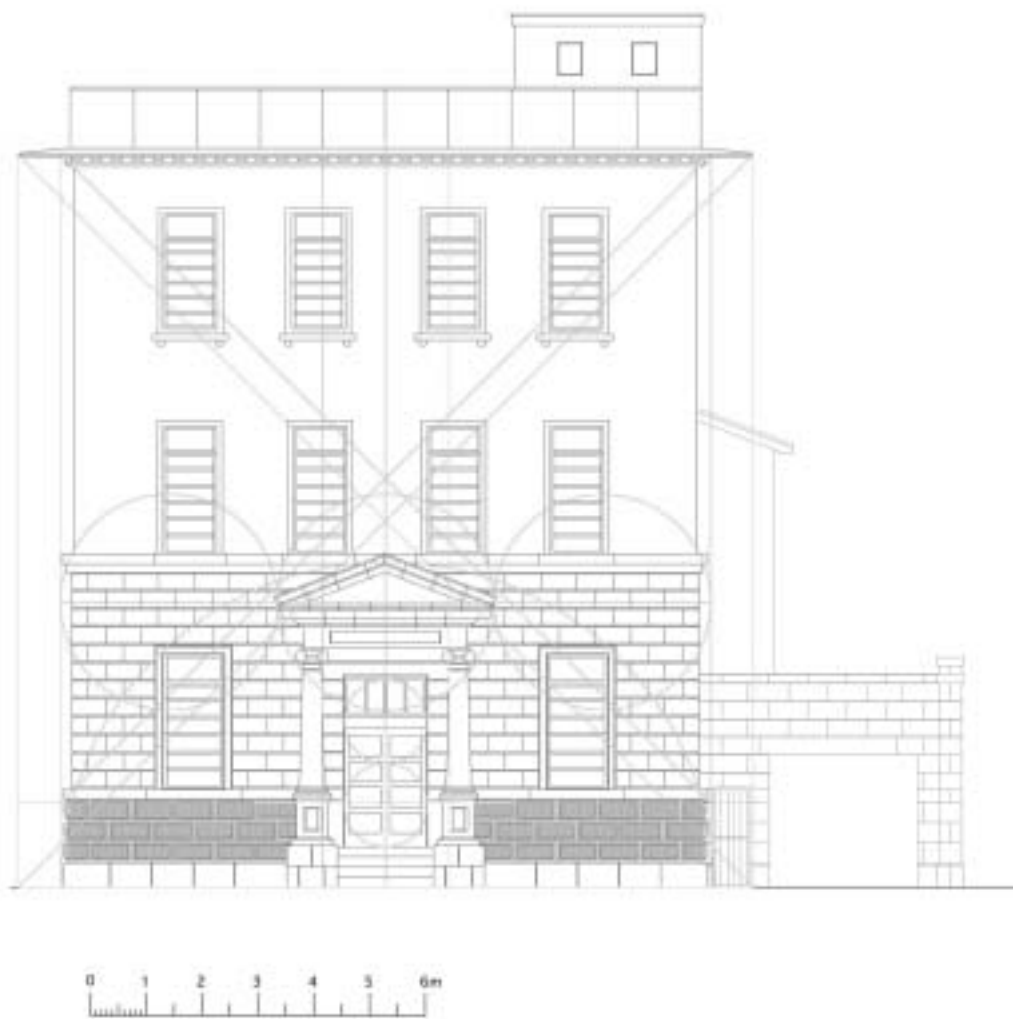


図9：北側正面図の構成分析図

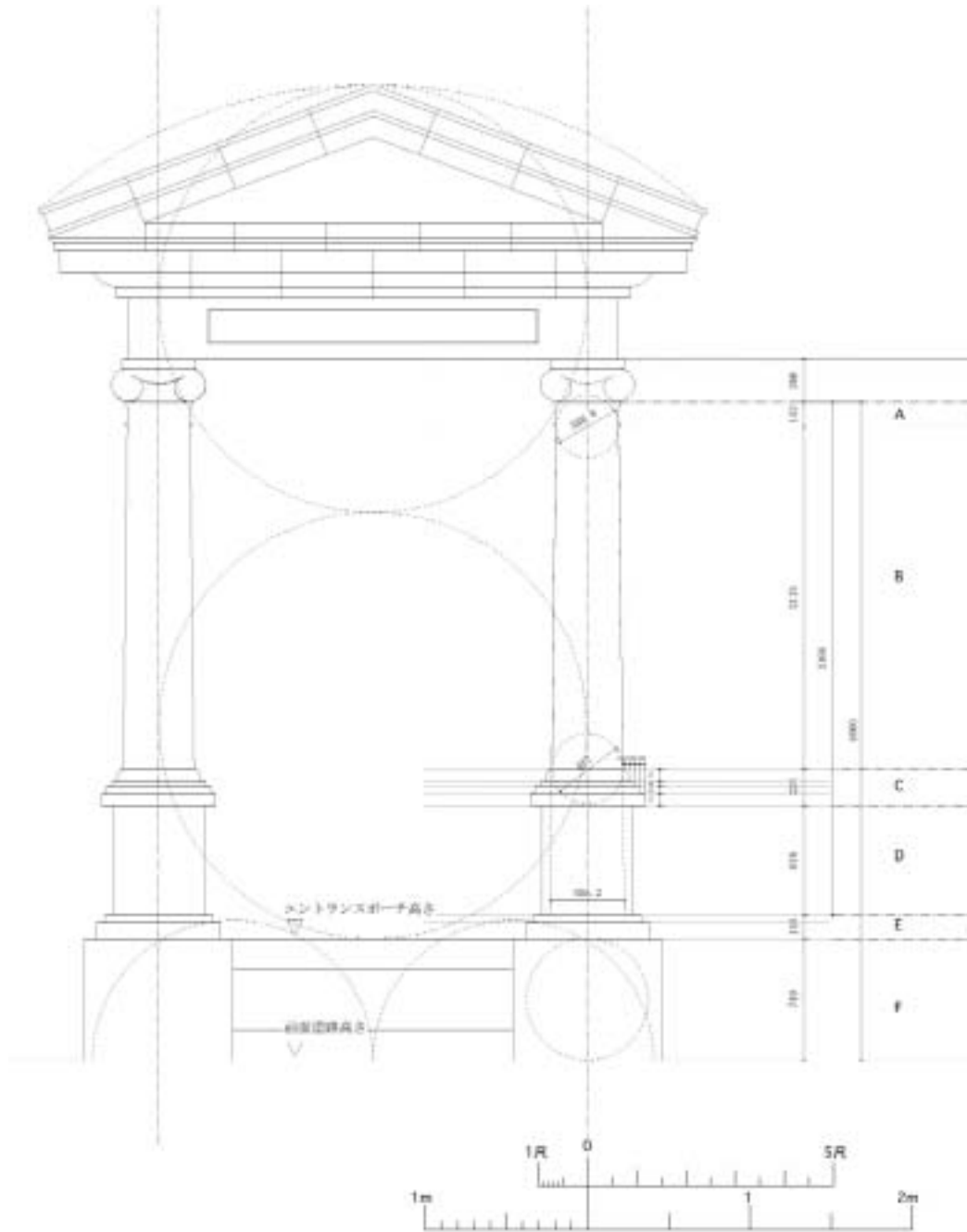


図10：エントランスポーチの柱の構成分析図

幾何学的手法を用いて立面の全体、あるいは各部が設計されたことがこのように暗示されるものの、では平面の寸法計画とどのような相関があるのか、それが次の課題となるであろう。作業を続行し、この建物についての理解を今後も深めていきたい。

#### 4、結語

旧西本組本社ビルに関し、若干の考察を述べた。改変の痕跡も多々観察され、建造当時の設計図書や写真などはほとんど残されていない状況である。小規模の事務所ビルでありながら、しかし多くの人々によって支えられている建築であり、地元にも愛されて、しばしばスケッチ会の描画対象ともなっている。建築学的な視点からの考察をこれからも重ねる必要が指摘されよう。

#### 参考文献

- Mark Wilson Jones, *Principles of Roman Architecture* (Yale University Press: New Haven and London, 2000).
- Vaughan Hart and Peter Hicks, *Sebastiano Serlio: On Architecture*, 2 vols. (Yale University Press: New Haven and London, 1996-2001).
- Vitruvius, *On Architecture*, 2 vols. Loeb Classical Library 251, 280 (Harvard University Press: Cambridge, 1931-1934).
- 小野佐世男展実行委員会・川崎市岡本太郎美術館「小野佐世男：モガ・オン・パレード」川崎市岡本太郎美術館（平成24 [2012] 年）。
- 河崎昌之「旧西本組本社ビルの保存と活用」、和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要第21号（平成13 [2001] 年）、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、pp.1-9。
- 早苗会「早苗会会誌」第6号（大正8 [1919] 年度）、同8号（大正10 [1921] 年）、早稲田大学理工学部建築学科。
- 早苗会「早稲田建築学報」第1号（大正11 [1922] 年）、早稲田大学理工学部建築学科。
- 中西重裕「わかやまワクワク探検隊」わかやま新報社（平成14 [2002] 年）。
- 日本建築学会編「新版日本近代建築総覧」技報堂出版（昭和58 [1983] 年）。
- 文化庁文化財部編「総覧登録有形文化財建造物5000」海路書院（平成17 [2005] 年）。
- 三井建設株式会社史編纂室「三井建設社史」三井建設株式会社（平成5 [1993] 年）。
- 和歌山県教育委員会編「和歌山県の近代化遺産：和歌山県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書」和歌山県教育委員会（平成19 [2007] 年）。
- 山崎霞舟「和歌山縣人材録 前編」和歌山日日新聞社印刷部（大正9 [1920] 年）。